

# 部活動経験によるキャリア意識の分化

—工業高校生を事例にした基礎的分析—

(教育臨床講座) 尾川満宏

The Differentiation of Career Consciousness and the Club Activity Experiences:  
A Basic Case Study of Technical High School Students in Japan

Mitsuhiro OGAWA

(平成28年7月19日 受理)

## 1. はじめに

本稿の目的は、工業高校の生徒を対象として実施した質的調査および質問紙調査をもとに、部活動経験と進路意識・キャリア意識の関連性の一端を明らかにすることである。本研究は、工業高校からの生徒のキャリア分化に対する問題関心にもとづいており、本稿はその初期フェーズの作業として、学校卒業後の仕事と生活に関する展望に対する部活動経験からの影響について基礎的な分析を行う。

今日の高等学校における部活動は正規の教育課程に位置づけられてはいない。しかし、部活動の意義と留意点としては、2009年3月告示『高等学校学習指導要領』第1章「総則」第5款5の(13)にあるように、「生徒の自主的・自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」(文部科学省 2009、p.23)が求められている。

また、生徒指導の文脈でも、ホームルーム担任や学年の教員、教科担任のみならず「部活動等の顧問」らも、広い視野から客観的かつ総合的な児童生徒理解に努め

るよう求められている(文部科学省 2010)。部活動指導にあたる教師には、所属している生徒の状況や意識を把握・理解するためのひとつの重要な場面としての部活動の積極的な側面をふまえ、そこでの生徒理解を教育課程に関連づけ、いかす必要性が指摘されているのである。部活動における「勝利至上主義」と「体罰」について言及した長谷川(2013)は、体罰とされる指導法について免責の余地はないとしながら、体罰行為の背景に生徒指導や「在り方生き方指導」に対する教師の熱意や信念があったこと自体は否定できない、としている。このように、部活動は生徒指導上の重要な機会であると考えられており、部活動という場のもつ意義に関する論述は各所で見受けられる。

部活動を通じた生徒指導にはさまざまな指導内容が考えられるが、生徒の進路希望にそくした指導や支援、すなわち進路指導的な内容が含まれることもあるだろう。進路指導においては、進路選択の過程や結果が生徒本人にとって主体的で納得のいく営みとなるよう、ガイダンスやカウンセリングを充実させることが必要である。このことは、進路指導やキャリア教育に関連する各種の手引きなどで強調されるほか、実際の高校生の進路形成に関する調査からも、読み取ることができる(尾川 2016)。こうした観点からは、定期考査期間の部活動休

止や、「受験生」からの部活動「引退」時期に関する相談など、進路にかかわる指導や相談は部活動の場面でも機能するものとみなすことができる。

さらに、学校経営上の戦略として部活動を進路選択機会の拡充に使用する場合（白松 1997）、上記の観点はより重要となる。大学入試の多様化により、推薦入試やAO入試など「読めない入試」（大谷 2013）、その他のいわゆる「一芸入試」などが、私立大学を中心に普及してきた。こうした変化が、高校内部での部活動に影響を及ぼしていることは想像に難くない。1980年代、特に男子において勉強との両立の困難を理由に部活動を継続できない生徒が一定数存在したが（青木 1989）、大学全入時代の到来もあいまって進学事情が変化した現在、進学のために部活動に精を出す生徒は増えても、やめる生徒は増えていないのではないだろうか。

しかし、「就職」をメインの進路としてきた各種専門高校においては、かねてから進路形成において部活動が重要視されてきた。高卒就職は実質的に「学校での職業選抜」だといわれるように（荻谷 1991）、企業での就職試験よりもむしろ、その試験を受験するための学校推薦を獲得することが内定獲得には決定的に重要であったからである。そうした校内での推薦獲得競争に勝ち残るうえで、部活動への参加状況が、少なくとも1980年代以降、一定のウエイトを占めてきた（荻谷 1991、片山 2010など）。そして、いまなお、部活動と進路の関係が教師の間でも生徒の間でも強く意識されていることは、筆者自身のフィールドワークから示唆されている<sup>1)</sup>。

#### 【職員室にて】

朝から応募前見学に行っている生徒が話題になる。先生たちから、「履歴書に何も書くことがない」「部活もやってない。写真部だったけど途中でやめた」「資格も平凡なのしかない」「趣味が読書で、2日に1冊読むって言うけど官能小説みたいなものだ。途中でちょっと絵が入るとるやつ」という生徒だと説明された。私が「そんなにみんな、(履歴書に)何か書くことがあるんですか？」と問うと、ある先生は「書くことないやつが多いな」という。別の先生は「1年生のことから何か見つけて自分でやらんと決められんで、っていうことは言い続けてきたのにな…」と残念そうな表情をしている。私が「部活

を3年間まっとうすることは、やはり重要ですか？大学生の就職活動などではサークルをやっていました、というのはもうあまり重視されていないんじゃないかと」というと、「そりゃ部活は大事よ」と皆口を揃えて答えた。

(フィールドノーツ2011/08/25)

#### 【ある教室にて】

部活動と就職との関係について生徒たちが話し合っている。各部活動の特徴と仕事内容との関係が話題になっている。

女子生徒：「部活のこと書かんと減点される!？」

調査者：「減点されるの!？」

女子生徒：「減点じゃないけど…やっといたほうが、書いた方が有利になるでしょ」

男子生徒：「どーなんだ？映画研究部！部活にもよるかもな」

部活動は人間関係のうまい、へたがハッキリするため、うまくない人にとってはマイナスになるかもしれない、との意見も聞かれた。しかし、部活動を続ければ、ガマン強さとか、頑張り屋さんとか、会社に入って上司に何をいわれてもガマンして働けるとかの様々なメリットを強調できる点があるとのこと。

(フィールドノーツ2012/08/22)

このように、部活動と進路の関連性は、専門高校の生徒や教師に強く意識されている。もちろん、学校推薦獲得の大部分は主要5教科や専門科目の学業成績に規定されているだろう（荻谷 1991、片山 2010など）。しかし生徒たちは、就職のための学校推薦を獲得すべく、学業成績のみならず学校生活全体への教員からの評価を得る必要があると考えているし、教師の側も、部活動経験の有無や取り組みの程度が実際の就職試験の結果に影響すると考えているのである。

教師や生徒たちのこのような現実的関心に対して、生徒の部活動経験と進路形成というテーマは、部活動研究においても、また進路研究においても十分掘り下げられてこなかったといわざるをえない。部活動と学業成績、進学アスピレーションとの関連を高校階層構造の観点

から分析した白松（1997）や、部活動による多様なライフスキル育成や進路成熟について国公立大学の学生に対する回顧調査から分析した上野（2014）などが、やや近いテーマを扱っているに過ぎない。これらの先行研究に対して本研究は、就職をメインの進路として想定する専門高校、なかでも工業高校での調査から<sup>2)</sup>、現代における部活動と進路というテーマの「足がかり」的な分析を行うものである。

## 2. 研究の方法と調査の概要

本稿の分析データは、中国地方の地方都市に所在する公立A工業高等学校と、関西圏の大都市に所在する公立B工業高等学校において実施された、生徒対象の質問紙調査から得られたものである。専門高校のなかでも工業高校を分析する理由は、他の専門高校・専門学科に比べて工業高校にはいまなお就職希望者が多く、部活動経験と就職をめぐる意識や実態により明確にアプローチできると考えたからである。本調査は2011年10月から2012年1月にかけて、各校、集合自記式で実施された。

調査を実施した高校について、少し説明しておこう。地方都市に所在するA工業は、県内偏差値40前後の学力底辺校であるが、専門高校としては伝統校で、これまで多くの若年労働力を地域労働市場へと輩出してきた。卒業時点での進路未定者はおおよそ各年1.0%程度に過ぎない。高卒無業者研究の対象となってきた都市部進路多様校と比較すると、A工業の進路未定率はきわめて低いといえるだろう。

さらに、A工業が所在する地域圏には地元企業が一定程度残っており、それによって地元の高卒労働市場は支えられている。地方によっては、地元求人が乏しいために県外への流出をとまなう就職（進学）によってでしか生徒の進路を確保できない学校群が無視できない規模で存在する。こうした観点からすると、本稿で扱うA工

業は、量的な面で一定程度地元の高卒労働市場との需給バランスが取れている地域の学校である。

他方、大都市に所在するB工業は県内偏差値が40弱であり、A工業と同様に学力的には地域の下位層が多く入学してくる学校である。B工業は、伝統的な機械系学科をはじめとして女子生徒を多く抱えるデザイン系の学科など多彩な学科で構成されており、「工業高校＝男子の学校」という従来のイメージとは必ずしも重ならない学校である。B工業が所在する地域の高卒労働市場はA工業の地域のそれよりも豊かであるが、調査当時のB工業の進路未定率はおおよそ20.0%前後であり。高卒無業者研究で取り上げられてきた学校イメージと重なる部分が多い。

本調査は両校で全校調査として実施されたが、本稿は分析対象を両校の1年生と2年生に限定した。その理由は、本調査が実施された時期が3年生にとっては進路の決定期であり、進路決定の有無や決定進路への満足・不満足が回答に影響する可能性が高いからである。

なお、両校にはそれぞれ特徴的な学科が設置されている。ほぼすべての生徒が女子である学科や、就職率が他学科に比べ極端に低く実質的に進学準備を行っている学科などである。学校の特色をとらえるためにはそうした学科が重要であるが、分析結果の普遍性をより追求する視点から、本稿では特徴的な学科を除いてデータセットを作成した。その結果、就職率や生徒の男女比率の違いを可能な限り小さくした、電気系、機械系、電子系、その他の学科に大別される602名の回答からなるデータセットを用いて分析することとする（表1）。

## 3. 分析と結果

### 3.1. 部活動の参加概況

まずは、調査対象者である生徒たちの部活動への参加状況について概観しておきたい。

表1 調査協力者の属性 (%)

学校所在地域			学年			性別			
大都市	地方都市	合計 (N)	1年生	2年生	合計 (N)	男	女	その他不明	合計 (N)
44.0	56.0	100.0 (602)	53.5	46.5	100.0 (602)	87.7	10.5	1.8	100.0 (602)

表2には、現在の高校部活動への参加状況を示した。これによると、約6割の生徒が部活動に現在参加しており、1割が入部したが退部した、そして3割が部活動には参加したことがないということになっている。2012年にNHKが実施した全国調査「中学生と高校生の生活と意識調査2012」によると、調査時点での高校生の部活動参加率は69.7%（運動部と文化部の合計）、非入部率が29.4%であったという（NHK放送文化研究所編 2013）。本調査の対象校の生徒たちの部活動参加率は、全国的な傾向と比較するとやや低いということになる<sup>3)</sup>。

表3は、部活動への入部時期、および退部した生徒については退部時期を示している。なお、この表のみ、3年生も含めた回答の集計結果を示していることに注意

されたい。入部時期については、93.3%の生徒が1年生のときに入部している。退部時期については、これもやはり1年生がもっとも多く66.8%、2年生のときが24.7%となっており、9割が3年生になる前に退部している。とりわけ退部者の7割弱が1年生のときに退部している。退部の理由について詳細に把握する質問項目は、用意されていない。

表4では、所属している部活動の週当たり活動日数を示している。これは、回答者に日数を自由に記入してもらったものをベースとして集計したものである。大きく分けて、週当たり1日から3日と、週当たり5日から7日の部活動に分けられるだろう。とはいえ、後者の割合が8割を超えており、部活動参加者の多くは週5日以上

表2 部活動への参加状況 (%)

入部している（引退した）	入部していたが途中でやめた	入部したことはない	合計 (N)
58.3	9.9	31.8	100.0(575)

表3 入部および退部の時期 (%)

入部時期				退部時期			
1年生	2年生	3年生	合計 (N)	1年生	2年生	3年生	合計 (N)
93.3	6.1	0.6	100.0 (508)	66.2	24.7	9.1	100.0 (77)

注) 表3のみ、1～3年生の回答の集計結果である。

表4 所属部活動の週当たり活動日数 (%)

0日	1日	2.0日	2.5日	3.0日	3.5日	4.0日
1.1	6.7	2.9	0.3	4.5	0.8	1.1
4.5日	5.0日	5.5日	6.0日	6.5日	7.0日	合計 (N)
0.3	11.2	2.1	38.0	2.7	28.3	100.0(374)

表5 所属している部活動 (%)

硬式野球部	11.92	情報処理部	2.07	水泳部	0.78
弓道部	7.77	クッキング部	1.81	漫画研究部	0.78
サッカー部	6.74	写真部	1.81	模型工作部	0.78
ソフトテニス部	6.22	柔道部	1.81	ダンス部	0.52
バスケットボール部	6.22	空手部	1.30	バトミントン部	0.52
ハンドボール部	5.44	山岳部	1.30	ラグビー部	0.52
陸上競技部	4.40	電気計測部	1.30	自動車部	0.52
バレーボール部	3.89	文芸部	1.30	美術部	0.52
演劇部	3.89	JRC部	1.30	吹奏楽・演劇部	0.26
軽音楽部	3.63	テニス部	1.04	放送・無線部	0.26
卓球部	3.37	レスリング部	1.04	クッキング、サッカー部	0.26
軟式野球部	3.37	書道部	1.04	ゲーマーズ部	0.26
吹奏楽部	3.11	フェンシング部	0.78	おで部	0.26
ロボット研究部	2.07	ボウリング部	0.78	ひみつ	0.26
剣道部	2.07	映画研究部	0.78		
合計 (N)					100.0 (386)

活動している。また土曜日や日曜日を含めて毎日活動している生徒も3割程度いる。昨今、部活動による教員および生徒の多忙が指摘されているが（たとえば、内田2015）、本調査でも一定数の生徒においてそうした傾向が推測される結果であった。なお、参考までに、生徒が参加している部活動の一覧および割合を表5に示した。

次に、部活動に参加することによって生徒にどのような影響や変化が生じたのか、生徒自身の認識から探っていく。表6は、部活動の経験について示している。多くの項目についておおよそ肯定的な回答が目立っている。部活動を通じた自身の成長について、関連する項目の肯定的な回答割合（「とてもあてはまる」と「あてはまる」の合計）に着目すると、「部活動を通して、友達関係が深まった」78.1%、「部活動を通して、礼儀を学んだ」61.0%、「部活動を通して、人間的に成長した」50.3%などとなっている。すべての項目において必ずしも高い値になっているわけではないものの、少なくとも生徒の半数以上が部活動を経験することによって自身の成長を感じているといえるだろう。

さらに、ここからは部活動と進路の関連性についてみていきたい。表6には、「部活動に関係した進路を選びたい」という項目が設定されている。この項目に肯定的に回答した生徒の割合は、20.0%となっている。否定的に回答した生徒の割合（「全くあてはまらない」と「あてはまらない」の合計）は46.3%だから、部活動に関係した進路を選びたいと思っている生徒は少数派というべきである。しかし部活動に関係した進路を選びたいと考えている生徒が2割いるということは、決して無視をしてよい数値ではないだろう。

また、「部活動を通して、自分の性格や長所・短所がわかった」「部活動を通して、自分の長所を伸ばすことができた」「部活動を通して、人間的に成長した」などの項目から分かるように、部活動を通して自身の成長を実感している生徒たちも多く存在している。

これらの項目への回答に表れている、部活動の経験に対する意味づけは、キャリア意識とどのような関係にあるのだろうか。次項で検討したい。

表6 部活動についての経験 (%)

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらでもない	あてはまる	とてもあてはまる	合計 (N)
1) 部活動を通して、友達関係が深まった	3.8	3.8	14.4	37.3	40.8	100.0(424)
2) いつもおなじ部活動の友達と遊んでいる	17.3	16.3	33.6	21.3	11.6	100.0(423)
3) 部活動を通して、礼儀を学んだ	7.3	7.8	23.9	34.0	27.0	100.0(423)
4) 部活で友達を助けたり、助けてもらったりした	6.1	6.9	26.2	36.6	24.1	100.0(423)
5) 部活動を通して、卒業生とのつながりができた	15.1	9.7	26.7	24.8	23.6	100.0(423)
6) 部活動に関係した進路を選びたい	22.8	23.5	33.6	12.2	7.8	100.0(425)
7) 部活動の経験は他にも活かせると思う	8.0	6.6	18.4	37.6	29.3	100.0(423)
8) 顧問の先生はその種目・分野の経験者である	7.4	6.2	20.2	26.6	39.7	100.0(421)
9) 部活動の練習や活動について部員どうして話し合いをしたことがある	7.8	7.1	21.0	34.5	29.6	100.0(423)
10) 練習方法や活動方法を自分で工夫したことがある	12.0	9.9	31.8	27.8	18.6	100.0(425)
11) 部活動を通して、自分の性格や長所・短所がわかった	10.1	8.7	29.6	28.7	22.8	100.0(425)
12) 部活動を通して、自分の長所を伸ばすことができた	12.0	12.7	38.0	23.6	13.7	100.0(424)
13) 部活動を通して、人間的に成長した	10.6	8.2	30.8	32.7	17.6	100.0(425)
14) 部活動の部員に自分の良さを認めもらった	11.3	11.1	45.2	21.2	11.3	100.0(425)
15) 自分が所属している部を誇りに思っている	9.4	7.3	27.8	26.4	29.0	100.0(424)
16) 自分が所属している部は、県内（都内・道内・府内）での大会成績が優秀だ	26.5	20.6	31.0	11.8	10.2	100.0(423)



表7によれば、部活動に関係した進路を選びたいと考えている生徒は、そう考えていない生徒に比べて「つきたい職業」を有している傾向にある<sup>4)</sup>。しかし、その中身についてみてみると、かれらが答えている「つきたい職業」は必ずしもスポーツ選手など部活動と直接的に関係する仕事ばかりだけではないことが理解できる。表8をみてほしい。部活進路希望あり、なしの生徒が自ら記入した、「つきたい職業」の具体である。これをみると、「ギタリスト」「プロ野球選手」「演劇などのタレント」「水泳のコーチ」「声優」など、高校での部活動の延長線にあるような職業もいくつか見受けられるが、ほとんどは工業高校の専門性にもとづく職業である。つまり、部活動と関係する進路を選びたいというのは、必ずしも現実的に目指すわけではないが願望としてそれを選択したか、あるいは武術系の部活動所属者が「警察官」を目指すなど、間接的に部活動経験をいかすことを念頭に置いて選択した可能性が高いといえるだろう。

部活動経験と将来の仕事や生活に対するキャリア意識の関連を分析したのが、表9である。まず、表9の分析方法を説明しておきたい。質問紙では、「将来の仕事や生活について、以下の考えはあなたにどれくらいあてはまりますか？」としてキャリア意識にかかわる16の質問項目を設け、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で回答を求めた。それらの質問への回答をもとに、「とてもそう思う」5点～「全くそう思わない」1点として、各項目への回答を得点化した。加えて、部活動の経験に関する質問項目(表6)から「部活動を通して、自分の性格や長所・短所がわかった」「部活動を通して、自分の長所を伸ばすことができた」「部活動を通して、人間的に成長した」の3項目への回答を先の作業同様に得点化し、さらに3項目の得点を合計して「部活動による成長実感得点」を作成した。この得点分布から回答者を三分位でカテゴリー化し、得点低位群、中位群、高位群とした。この得点群に応じて、キャリア意識16項目の得点に差が生じているのかどうかについて分析したのが、表9である。

まずは、検定の結果、統計的に有意な差が認められた項目に着目してみよう。まずは「学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい」という項目について、部活成長実感低位群や中位群に比して、高位群の生徒は肯定

的に回答している傾向が読み取れる。部活動を通じて自身の成長を感じられた生徒、すなわち部活動経験をポジティブに意味づけしている生徒は、学校での授業その他の学習活動にも適応傾向を示しているといえるだろう。

また、「いろんな仕事や職場を経験したい」「有名になりたい」「仕事に『生きがい』を感じたい」といった項目においても、部活成長実感の程度に応じて、回答傾向に差異が表れている。部活動を通じて自身の成長を感じている生徒は、学校卒業後の職業的ないし社会的な成功に対する関心が高いということであろう。いろいろな仕事や職場を経験するなかで、仕事に生きがいを感じながら、有名になりたい。部活動での活動に充実を感じている生徒たちは、将来の仕事や生活に、このようなキャリアの“成功”を展望しているといえることができるかもしれない。あるいは、やや飛躍した解釈が許されるならば、しばしば問題視される古典的な部活動指導の論理—「勝利至上主義」的な思考様式—が、部活動参加者個人の将来展望にまで、流れ込んでいるとはいえないだろうか。

部活動成長実感が相対的に高い生徒たちは、「人よりも、高い給料をもらいたい」「仕事を選ぶときは、仕事内容よりも給料など働く条件を重視する」といった項目においても肯定的に回答する傾向にある。各群の間の平均値の差がきわめて大きいというわけではないが、ここでもやはり、仕事内容に対する充実よりも高い給料への満足を優先するという、分かりやすい“成功”を志向していると解釈できるだろう。

表9からは、部活動を通じて成長を実感している生徒のキャリア意識は、総じて“欲張り”であることが読み取れる。“欲張り”という表現で、かれらのキャリア意識を非難したいのではない。そうではなく、統計的な有意差が確認された項目のなかに、部活動成長実感と反比例の関係を示す項目がひとつもなかったことを、やや驚きをもって報告したいのである。かれらは“成功”のために何らかの“代償”<sup>5)</sup>を払おうとは考えていないようである。こうした“欲張り”なキャリア意識が進路決定をどう左右するかについては、本稿ではデータの性質・制約から、十分に議論することができない。しかし今後の研究課題として、重要な論点とする必要があるように思われる。

表9 「部活動を通じた成長実感」の程度でみたキャリア意識の平均値の比較（一元配置分散分析）

	部活動成長実感	平均値	N	F 値	
1) ずっと県内で働きたい	低位群	3.01	99	2.26	
	中位群	3.24	178		
	高位群	3.35	144		
2) 一人暮らしをしたい	低位群	3.86	99	2.70	
	中位群	3.72	178		
	高位群	3.99	144		
3) いろんな仕事や職場を経験したい	低位群	3.20	99	4.46	*
	中位群	3.37	177		
	高位群	3.61	144		
4) 学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい	低位群	3.07	99	11.52	***
	中位群	3.46	177		
	高位群	3.78	144		
5) 親（保護者）とおなじような仕事につきたい	低位群	2.13	99	2.81	
	中位群	2.33	176		
	高位群	2.47	144		
6) 将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	低位群	2.49	100	1.62	
	中位群	2.57	178		
	高位群	2.75	144		
7) 自分に合わない仕事はしたくない	低位群	3.87	98	1.49	
	中位群	3.83	178		
	高位群	4.04	144		
8) 有名になりたい	低位群	2.51	100	9.36	***
	中位群	2.74	178		
	高位群	3.15	144		
9) 海外で仕事をしたい	低位群	1.98	100	2.39	
	中位群	2.20	177		
	高位群	2.31	143		
10) 仕事に「生きがい」を感じたい	低位群	3.66	100	8.56	***
	中位群	3.66	178		
	高位群	4.11	144		
11) やりたい仕事ならフリーターでもかまわない	低位群	2.39	100	0.33	
	中位群	2.27	178		
	高位群	2.35	143		
12) 人よりも、高い給料をもらいたい	低位群	3.72	100	4.85	**
	中位群	3.82	177		
	高位群	4.11	143		
13) 仕事よりも、趣味や私生活を大事にしたい	低位群	3.40	100	0.03	
	中位群	3.38	178		
	高位群	3.37	144		
14) 仕事を選ぶときは、仕事内容よりも給料など働く条件を重視する	低位群	3.21	100	3.09	*
	中位群	3.13	177		
	高位群	3.41	143		
15) 将来のことを考えるよりも、今を楽しく生きたい	低位群	3.64	100	2.06	
	中位群	3.37	176		
	高位群	3.40	144		
16) 将来も、現在の友達といつも付き合っていると思う	低位群	3.54	100	4.27	*
	中位群	3.59	177		
	高位群	3.86	144		

## 4. まとめと今後の課題

本稿では、2つの工業高校の生徒に対する質問紙調査の結果をもとに、かれらの部活動経験とキャリア意識の

関連について基礎的な検討を行った。本稿の分析から明らかになったのは以下の諸点である。

まず、「部活動に関係のある進路を選びたい」と考えている生徒は2割程度存在し、またそのように考えている

生徒は「つきたい職業」をより明確に有していることも示唆された。しかしながら「つきたい職業」の具体的な中身を確認すると、部活動の直接的な延長線上にある職業より、学校での学習内容と関連性の高い職業が多数であった。「部活動に関係のある進路を選びたい」という意識は、学校での学習内容や学校生活への適応に影響を与えている可能性が示唆された。

次に、少なくない生徒が、部活動を通して自身の成長を実感していた。また、そうした実感の程度に応じて、キャリア意識に差異が生じていることが明らかになった。一つ目の差異は、繰り返しになるが、部活動成長実感が高い生徒ほど、学校での学習内容と関連性の高い職業を目指そうとしている点である。二つ目の差異は、部活動成長実感の高い生徒は、進路形成やキャリア形成の“成功”を志向する傾向にある点である。そして、総合的には、部活動成長実感の高い生徒のキャリア意識は、“成功”のための“代償”は払いたくないという、“欲張り”なものであることが明らかになった。そうした“欲張り”が進路決定において吉と出るのか凶と出るのか。今後さらなる調査と検証が必要である。

もちろん、キャリア意識の背景には、部活動経験以外の学力的な問題や生徒文化、家庭の経済的事情などが潜んでいる。それらの指標を用いてより複雑かつ現実的な仮説モデルを生成し、キャリア意識の規定要因などを検証していくことが今後求められよう。本稿の意義は、従来、部活動経験と進路形成やキャリア形成の関連が十分検討されてこなかったが、キャリア意識の形成モデルのなかで部活動経験をより積極的に、精緻に扱う必要性を、データにそくして示した点にある。また、実践的な示唆

としては、今後の部活動をいかに組織化していくか、教師の視点のみならず、生徒による部活動の経験のされ方や、生徒のキャリア意識を踏まえて検討する必要性を指摘できるだろう。

なお、表10や表11のように地域比較を行うと、同じ工業高校の生徒であっても部活動への参加状況や、部活動と進路を結びつける考え方に大きな違いが確認されている。本稿では地域比較を詳細に行うことができなかったが、これについては稿を改めて検討したい。

また、白松（1997）が多様なランクの高等学校を調査対象として分析を行ったように、専門高校以外の普通科高校をはじめとする進学志向の高校などとの比較も今後求められよう。本稿は工業高校の分析であったため、大学入試などにはあまり着目してこなかったが、普通高校を含めた分析では大学入試の多様化なども配慮した分析や考察が必要となろう。今後の課題としたい。

## 注

1) 2010年夏より約2年半、A工業のフィールドワークを行った。工業高校の内部過程、とりわけ教師たちによる指導実践の具体的過程と、それに対する教師自身の意味づけや、生徒たちの日常的な学校生活の様子、進路形成過程における生徒の意識の機微などに着目しながら、学校内での観察や教師インタビュー、生徒インタビュー、学校資料の収集などを行った。教師による生徒指導・進路指導に着目した分析は尾川（2012）を、生徒の進路形成過程に着目した分析は尾川（2016）を参照されたい。

表 10 部活動の参加状況の比較 (%)

	入部している (引退した)	入部していたが 途中でやめた	入部したことはない	合計 (N)	
大都市 工業高校	41.8	10.0	48.2	100.0(249)	***
地方都市 工業高校	70.9	9.8	19.3	100.0(326)	

表 11 「部活動に関係した進路を選びたい」への回答の比較 (%)

	全くあて はまらない	あて はまらない	どちらでも ない	あてはまる	とてもあて はまる	合計 (N)	
大都市 工業高校	26.6	21.4	25.3	13.6	13.0	100.0(154)	**
地方都市 工業高校	20.7	24.7	38.4	11.4	4.8	100.0(271)	

- 2) この記述は、どの地域のどの学校においても専門高校は就職をメインの進路に想定していることを意味しない。大学進学実績において普通高校に引けを取らない専門高校も存在するし、本稿の調査対象校であるA工業には大学・短大や専門学校への進学を想定した進路指導を行う学科が存在している。
- 3) NHK放送文化研究所編(2013)は、部活動参加状況を「体育系(運動部)に入っている」「文化部に入っている」「入っていない」「わからない・無回答」の4カテゴリーに整理しており、退部経験は把握していない。
- 4) この結果は、東京都立専門高校の生徒を対象に、運動部/文化部および参加/非参加のみで同様の分析を行った熊谷(2010)の結果とはやや異なっている。今後、より詳細な分析と解釈が必要である。
- 5) ここでいう“代償”とは、「有名になりたい」「人よりも、高い給料をもらいたい」と考えるのであれば「ずっと県内で働きたい」「仕事よりも、趣味や私生活を大事にしたい」「将来のことを考えるよりも、今を楽しく生きたい」ことはある程度あきらめる、などの意識の持ち方を想定している。しかし、「ずっと県内で働きたい」「仕事よりも、趣味や私生活を大事にしたい」「将来のことを考えるよりも、今を楽しく生きたい」では、部活動成長実感の程度に応じた違いは観察されなかった。それどころか「将来も、現在の友達といつも付き合っていると思う」の項目では、部活動成長感と正比例の関係を示している。

## 引用参考文献

- 青木邦男、1989、「高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因」『体育学研究』34(1)、pp.89-100。
- 長谷川祐介、2005、「高校部活動の多様性をもつ影響力の違い—パーソナリティへの影響を中心に—」『日本特別活動学会紀要』13、pp.43-52。
- 長谷川祐介、2005、「部活動経験者の高校生活—活動内容の多様性に着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域』54、pp.71-78。
- 長谷川祐介、2013、「高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み—指導者の暴力、部員同

士の暴力・いじめに着目して—」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』35(2)、pp.153-163。

- 荻谷剛彦、1991、『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム—』東京大学出版会。
- 片山悠樹、2010、「専門高校の職業選抜—工業高校を事例に—」中村高康編『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ—』ミネルヴァ書房、pp.118-140。
- 熊谷信司、2010、「専門高校の生徒の部活動と学校適応—部活動における専門性を視野に—」『研究所報 VOL.57 都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査』、ベネッセコーポレーション、pp.90-99。
- 文部科学省、2009、『高等学校学習指導要領』東山書房。
- 文部科学省、2010、『生徒指導提要』教育図書。
- NHK放送文化研究所編、2013、『NHK中学生・高校生の生活と意識調査2012—失われた20年が生んだ“幸せ”な十代—』NHK出版。
- 尾川満宏、2012、「トランジションをめぐる『現場の教授学』—ある地方工業高校における学校と職業の接続様式—」『子ども社会研究』18、pp.3-16。
- 尾川満宏、2016、「地方の工業高校生が語る進路選択の論理—生徒のメリトクラシー意識とローカリズム意識にみる進路指導の課題—」『教育学研究紀要』(CD-ROM版) 61、pp.31-36。
- 大谷奨、2013、「大学入試の多様化と進路選択・進路指導」東北大学高等教育開発推進センター編『大学入試と高校現場—進学指導の教育的意義—』東北大学出版会、pp.7-26。
- 白松賢、1997、「高等学校における部活動の効果に関する研究」『日本教育経営学会紀要』39、pp.74-89。
- 内田良、2015、『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」—』光文社。
- 上野耕平、2014、「ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響」『スポーツ教育学研究』34(1)、pp.13-22。
- 謝辞：本研究はJSPS科研費 16K17423の助成を受けたものです。(This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 16K17423.)